2009 年 6 月 13 日　事前講義

インドネシアの村落:フィールドワークという実践

島上宗子（京都大学地域研究統合情報センター／あいあいネット）

講義では、主にインドネシアの村落における報告者のフィールドワーク体験を題材に、フィールドワークを実施する上で報告者が重要と考えるいくつかのポイントを指摘した。フィールドに「頭」から入らない（自分の仮説・枠組みに縛られない)、インタヴューだけが調査ではない、五感を総動員する、じっと見つめる目を養う、些細な違和感・疑問を見逃さない、混乱を恐れない、などである。また、フィールドワークは、調査対象とする社会との関係・相互作用の上に成り立つ手法であり、フィールドワーカーの存在およびフィールドワークという行為自体が、当該社会に変化・影響を与えうるという意味で「実践」としての側面を持つことを指摘した。

講義の後半では、インドネシアの村落の特徴と地方行政機構の中での位置づけ、とくにスハルト政権時代に実施された村落行政の画一化政策、および民主化・分権化後の変化について概説した。最後にフィールドスクールの開催地となるタマン・ジャヤ村の概要を紹介した。

（記録：島上宗子）